
三度目の異世界

鉄骨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三度目の異世界

【Nコード】

N1519T

【作者名】

鉄骨

【あらすじ】

主人公は過去に二度、異世界に召喚された。しかしその都度なんとか元の世界に帰還できた。今回も帰る方法は簡単に見つかったものの……。本作品は主人公最強ハーレムものになる予定です。また、更新は不定期となりますのでご了承くださいませ。

1話（前書き）

暇つぶしで適当に書いていたものがなんとなく溜まってしまったので投稿してみました。

気が向いたときにでも読んでみてください。
よろしくお願いします。

1話

俺は途方に暮れていた。

仕事を終えて帰宅し、自分のアパートのドアを開くとそこは異世界だった。

現在の状況を文章にして表すとたった一行で済むことなのだが、これ以上の確な表現もあるまい。

「……またかよ」

俺はつい口にしてしまった。

実は、今回のこれは3回目のことで、以前にも俺は異世界に誘われたことがあった。

1回目は風呂からあがろうとして、風呂場のドアをあけたら異世界だった……。

真っ裸で異世界の森に放り出された俺は、正に原始人のような暮らしを3年、そしてそれから帰る方法を見つけて地球に戻るまでに30年を費やした。

俺の人生の中の33年を異世界で過ごしたわけだが、今の俺の外見は20代中ごろ。

これには理由があり、実は異世界にいたときにエルフの秘薬を飲み、その効果で外見が若返ったのと、寿命が大幅に延びた為だ。

そして向こうでは33年を過ごしたものの、こちらではほんの数分しか時間が経過していなかったようで、当時一緒に暮らしていた両親にも変な服装をして風呂から出てきたとしか認識されなかった。

2回目は大学のトイレのドアが異世界に通じていた。

事を済ませた後だったから良かったものの、あれが事前のことだったらどうなっていたのか……。

トイレの先はどこかの地下室に繋がっていて、そこを抜けたらとある城の大広間。

色々あって、勇者に仕立て上げられた。

魔王を倒して帰る方法を見つけるまでに12年。

帰ったら現実世界では数分しか経っていなかったのは相変わらずだったけど、講義の内容やらなんやらをすっかり忘れ去ってしまった。いて、大変な思いをしたのも今ではいい思い出。

それに比べたら今回はまだ良心的？ な感じがするが、こちらの都合など関係なく誘うのはやめていただきたい。

事前にお知らせがあっても、それはそれで嫌なもんだが……。

パタン……。とアパートのドアを閉め、もう一度開けてみる。

そこにはいつもと変わらない一人暮らしの部屋の風景が……無く、鬱蒼とした森が広がっている……。

「これ、無視しちゃいけないかな……」

しばらくの間現実逃避していると、突然ドアの向こうの風景が輝きだした。

「……………おおお!？」

あまりの眩しさに目を瞑り、恐る恐る目を開ける。

目の前にはいつもと変わらない一人暮らしの部屋の風景が……………無かった。

換わりにあつたのは人、人、人。人の群れだった。

周りを見渡せば俺は何やら大仰な祭壇の上に立っており、目の前には半裸な女性。

考えてみて欲しい。

明らかに何かを祀っている祭壇の上に立つ、くたびれたスーツを着ているサラリーマン。そしてそれを眺める人の群れ。シニールであることこの上ない。

「勇者様！ お待ちしておりました!」

半裸な女性が叫ぶように声を出す。そしてそれに呼応して群衆のどよめきが大きくなる。

「……………またか」

俺のつぶやきは喧騒の中、誰の耳にも届くことはなかった。

半裸な女性はアミラリユードと名乗った。

なんでも、彼女は月の巫女だそうで、勇者の召喚の為に儀式を行っていたらしい。

そうしたら強い輝きと共に俺が現れたのだそうだ。

魔王が怖いから倒してくれて、これまた「……またか」とため息をつく俺。

「んで？ 魔王を倒すって話はいいとして、その魔王は何をやらかしたんだ？」

「え？ ……ええ、そうですね。魔王をはじめとする魔族は私達と違って黒い肌や青い肌をしていますが、現在も私達人間の国と戦争中で、私達人間の共通の敵です！」

「なるほど。具体的には魔族は何をしたんだ？」

「人間がたくさん殺されました！ 魔族との戦争の為に家族を失った人たちもここに沢山います！ お願いします、勇者様。魔王を倒して私達を御救いください！」

そういつてアミラリユードは俺に頭を下げる。

「アミラリユードさん、最初に聞いておきたいんだが」

「はい」

「俺を元の世界に返す方法はあるか？」

「……………」

「ないのか？」

「……申し訳ありません」

「ないのか」

俺がため息をつくとき、アミラリユードさんはビクッ！と体を震わせる。

「俺を召喚した儀式で過去に召喚された人達はどうなってる？」

「……過去に召喚された人はおりません。勇者様が初めてです」

「……ということは、俺が初めての被召喚ってこと？ まじか……………」

初めて召喚できたってことは、まだ召喚の技術が熟成されていないな
いってことだし、何よりも返す技術なんて発想すらないだろうな……。

頭痛くなってきたかも。

「あ、あの……………」

「とりあえず、俺が魔王を倒すか倒さないかは、俺がちゃんと元の

世界に戻れることがわかってからだ。いいな?」

「ええっ!?!? ……そ、そんな」

「いやいやいや。むしろショックなのはこっちなんだが……」

「……………」

「というわけで、帰る方法の目途がたったら教えてくれる? それまでは適当にこの辺りをブラブラさせてもらっよ」

「勇者様っ!?!?」

後ろでアミリリウドさんの叫び声が聞こえるけど、それを無視して俺は歩き出す。

「とりあえず、向こうの話も聞かなきゃ状況がわかんないよな……」

人目のつかない場所まで来た俺は認識障害の魔法と飛行魔法を使って空から大地を眺める。

「さて……と」

意識を集中すると、すぐに強い魔力を感じることが出来た。

「魔王っていう名前だしな。この強そうな魔力、間違いないかな?」

俺はその方向に向かって高速で空を移動する。

途中、音速を突破したような音がしたけど気のせいだろう……。

2話

「あんたが魔王か？」

俺は玉座に腰かけているばかりでかい影に話しかけた。

やたら暗い室内のせいで姿が全然見えないけど、感じる魔力は間違いない。こいつが一番だ。

「……お前は何者だ？ 我的感知魔法にも引つ掛からず、堂々と玉座に入ってくるとは……」

「そうだな、俺は勇者候補ってとこだ」

「……なんだと!？」

「あゝ、まあ、あんたを今すぐ殺すとか、そういうことはしないから安心してくれ」

「ほう？ 我を殺すとな？ 大した自身だが、試してみるか？」

「いや、そういうことはやめとく。俺はあんたに話を聞きに来ただけだしな」

「話だと？ 貴様のような人間に話すことなど何もないと思うがな」

「そう言っつなよ。戦争相手だからって、話もしちゃいけないってことはないだろ？ それにそもそも、俺はこの世界の人間じゃないしな」

「……なるほど、異世界人か？」

「うん。こっちの人間に強制的に呼び出されちゃった。それでもって、あんたを倒してくれって頼まれた」

「脆弱な人間共が考えそうなことだ。自分達では何もできないから他人を、しかも異世界人を頼ろうなど」

「全くだ。意見が合うな」

「それで？ 話とはなんだ？」

「魔族と人間って、なんで戦争してるんだ？」

「知れたこと。……人間共が我々の仲間を殺したからだ。その上、魔族などという名前で我々を差別し、一方的に悪とした。我らはやられたことをやり返したに過ぎん」

「なるほどな。どっちもどっちってことか。……発端は人間側にありそうな感じだけだな」

「勇者候補よ、お前の名は？」

「俺の名前はマコトだ。魔王、あんたの名は？」

「我の名はフォルスナだ。……マコトよ、お前は話のわかる人間だようだ。……我のものにならぬか？」

「悪いが、まだどちらにつくかは判断できかねる。……魔族側に傾いてはいるがな」

「……そうか」

「それに、俺は男のものになんてならん！」

「ならば、我のものになれ」

「……フォルスナさん？ 話聞いてた？ 男のものにはならんて……」

「我は女だ」

「……へ？」

こんな大柄な女の人嫌だなあ……。とか思っていたら、フォルスナの影が一気に縮み、そこには小柄なおばさんが佇んでいた。

「見よ。我は女だ。これでマコトの条件はクリアされたな？」

「フォルスナさん。申し訳ないが俺は若い女が好みなんだ……」

これだけは譲れない！ いや、フォルスナもおばさんにしては綺麗な部類だろうけど、……ねえ？

「なんだ、そうだったのか？ 仕方がない、それならば私の娘達から気に入った者のものにならぬか？」

「娘？」

「うむ。今すぐこの場に呼ぶから、一目見て見ぬか？」

「ああ、とりあえず見るだけなら」

「それでは呼ぶぞ」

フォルスナはそう言うと言意識を集中して、何もない広間の空間に向けて手のひらをかざす。

娘達つてことは、何人かいるのか……？

今までの異世界でも関係を持った女性はいたが、結局俺は地球に帰りたいってこともあって、あまり深い関係にはならなかった。

自由に異世界を行き来できれば、もっと踏み込んだのかもしれないけどなあ。

気がつくと広間は青白い光に包まれていた。

そして一瞬、目が眩むほどの光に俺は思わず目を手で覆つ。

光が収まった広間を見渡した俺は思わず呟く。

「……多すぎだろ」

まるでこの世界に来たときの状況のようだった。

俺の目の前には人、人、人。違うところと言えば、その人達が全て女性だったことだ。

普通の人間のような外見の子。青い肌、赤い肌、黒い肌、耳が尖っているもの。獣の耳を持ったもの。角の生えたもの。尻尾の生えたもの。

ありとあらゆる種族の娘がその場に存在していた。

「どうじゃ？ 気に入った娘はおるか？」

「……これ、全部フォルスナさんの娘なのか？」

「うむ。まだいるが、全員をこの場に呼ぶことは適わなくてな。とりあえず若い娘を中心に200人程召喚しておいた。気に入った娘がいれば声を掛けてみるがよい」

「うーん……」

俺はせいぜい多くても10人前後かと思っていたから、正直なところ途方に暮れていた。

「気に入るものはおらぬか？ それとも人数が多いか？ 多いのなら少し送り返して少なくするぞ？」

「確かに多いが、送り返すことができるのか？」

「うむ。呼んだのだから、送り返すことなど造作もないことじゃ」

うん？ これはひょっとして、ひょっとするかも？

「フォルスナさん。ひとつ頼みがあるんだが……」

今回の帰る方法は、どうやら魔王から学ぶことになりそうだ。

3話

「なるほどな。帰る方法か。確かに我の召喚魔法を体得すれば可能性はあるな」

「やっぱりそうか！？ いやあ、良かった。んじゃ早速教えてくれないか？」

「いいだろう。しかし可能性は確かにあるが、マコトが我の召喚魔法を覚えても帰れるかどうかはわからぬぞ？」

「何故だ？」

「我の召喚魔法は自分自身を召喚対象にすることはできぬのだ」

「ということは、俺が召喚魔法を覚えたとしても俺は帰れないのか？」

「うむ」

「じゃあ、フォルスナさんが俺を送ってくれるというの？」

「それも適わぬ」

「何故だ？」

「我がマコトの世界の場所を知らぬからだ。我も知らぬ場所へ送ることはできぬ」

「なるほどな……」

「だが、ひとつだけ可能性がある方法がある」

「ほんとか!？」

「うむ、それはだな――」

フォルスナが言った案は、まず俺が召喚魔法を体得する。
そして俺自身がまず召喚魔法で俺の世界に人を送り、送り込んだ
人にあらためて俺自身を向こうに召喚してもらう。というもの。

うん、確かに可能性がありそうだ。

それに過去2回の帰還方法に比べてだいぶ楽そうだな。

ん？ 過去2回の帰還方法？ そりゃ大変だったよ……。

一回目は5年1月22日の周期で魔力が蓄積される世界樹と1週
間に及ぶ魔術儀式を駆使して、それこそ奇跡的に帰還。

二回目の帰還方法自体は簡単で、魔王の持っていた杖の力を解放
して魔方陣に流すだけだったんだが、その杖をめぐって王様を敵に
回してしまい、随分と苦労した。

「ただ、その方法には制約があるのだ」

「制約？」

「うむ。一つはこの世界でこの召喚魔法を使えるのは我とその娘達だけということ」

「ふむ」

「ということは俺の世界に送るのはフォルスナの娘しかダメってことか。」

「そして2つ目。召喚魔法は魂の繋がりがあるものしか対象にできる」

「魂のつながり？」

「うむ。要するにマコトと血縁関係、婚姻関係にあるものしか召喚魔法の対象にはならぬということだ」

「まじかよ!？」

「ということはマコトよ、我の娘と結ばれるしかお主は帰れないということになるのう」

フォルスナはニヤツと、魔王という名に相応しい笑みを浮かべた。

「うーん……。本当にそれしか方法がないものか……。ってところだよなあ。」

「……フォルスナさん、俺がフォルスナさんの娘さんと結ばれることによって、フォルスナさんが俺に求めることはなんだ？」

「うむ……、我がマコトに求めるのは人間に対する抑止力と我らの安全の保障だ。できればそのまま我の後を継いでもらえると嬉しいのだがな」

「なるほど、納得だ。魔王を継ぐつてのは勘弁だけだな」

「そうか。しかしその顔から察するに、我の娘を娶るという我の提案も前向きに検討してもらえそうで安心したぞ」

「……まだ回答は控えさせていただくよ」

「どうしたもんかな」

といつても、帰るには今のところその方法しかなさそうだし、そろそろ嫁さんをもらうのもいいかと考えていたから、フォルスナの案に乗るのもやぶさかではないんだが。

それにしても、200人以上の娘がいるって、一体フォルスナは何歳なんだよ……？

今、俺はフォルスナの用意してくれた一室でくつろいでいる。

食事もいただきちゃったんだけど、200人の女の子が見ている中の食事なんて食べた気がしなかった。

コンコン

ベッドで横になっていると、不意にノックの音が部屋に響いた。

誰だ？

「はい！ 開いてるからどうぞー？」

俺が返事をドアの向こうの人物に返すと、ドアを開けて一人の女性が入ってきた。

「お休み中失礼いたします」

優雅な所作で俺に挨拶をする女性。

女性の見た目は一言で言って完璧。

輝くような美しい金の髪は真っ直ぐで長さは腰の高さまであり、切れ長の透明な瞳は青く、その肌は白く、雪を思わせる。

フォルスナと同じような魔力の波長からして、彼女はフォルスナの娘の一人ということで間違いないだろう。

「えっと、君は？」

「私の名はフィレーネ。娘達の代表として伺いました」

「そっか。……んで、用件は？」

「ハイ。マトコ様の实力が知りたく存じます」

「ほう」

「お母様はマコト様を認めたようですが、私達はマコト様が本当に魔王を継ぐに足る實力を有しているのか。そして私達を娶る資格があるのかどうかをこの目で確かめさせていただきたいのです」

「ふむ、わかった」

「……いいのですか？ その實力を証明する方法すら私はご説明していないのですが？」

「俺の實力が知りたいんだろ？ ま、適当に魔法とか見せればいいか？」

「……そうですね。では明日までに準備をしておきますのでよろしくお願いいたします」

「あいよ」

「それではまた明日。お休みのところを失礼いたしました」

そう言い残し、フィレーネは俺の部屋を後にした。

あんな女性と結婚できるかも知れないのか……。

「よし！ 頑張ろう！」

俄然やる気が漲ってきた！

4話

総勢200名の女の子に囲まれる俺。

少し遠くの壇上にはフォルスナが優雅に事の推移を見守っている。

「マコト様、よろしいですか？」

フィレーネが俺に声をかける。

「ああ、いつでもいいぞ。何をすればいいんだ？」

「はい。マコト様には魔王を継ぐ者として、その魔力を私達にお見せいただきたいと存じます」

「魔力ね……。で？ 具体的な方法は？ 魔法であの山でも砕けばいいか？」

「……は？」

フィレーネは『こいつは何を言ってるんだ』というような表情をする。

女の子達の中にもザワつきが波紋のように広がっていった。

「いや、魔法で山でも砕けば納得するのかなと」

「そんなことができるとは思えません」

「できるから言ってるんだが……。やって見せれば納得するか？」

ザワつきが一段と大きくなったところで、俺は魔力を集中させる。目標の山は500メートル程遠くの小高い岩山だ。あれくらいなら全力の魔力を出さなくても破壊できる。

俺は集中させた魔力を対象に向け、一気に爆発させる。

すさまじい轟音とともに岩山は木っ端微塵に、そしてその光景とは裏腹にその光景を目撃したフィレーネをはじめとするフォルスナの娘達は完全に沈黙していた。

「マコトよ、流石だな」

フォルスナだけは俺の実力がはじめからわかっていたのか、上機嫌で声をかけてくる。

「とりあえず、こんなもんでいいか？」

「……………」

「おい？」

俺の問いにフィレーネは何も答えない。……口を半開きにして呆けているような感じだから、答えられないというのが正しいのか、いずれにせよ折角の美人が台無しだ。

「……………」

「お？」

「マコト様、すごいです！　これほどの魔法、私初めて見ました！」
堰を切ったようにフィレーネはすごい勢いで俺にまくしたてる。

「え、いや……、ありがとう？　でいいのか？」

「マコト様になら私、忠誠を誓います！　いえ、誓わせてください！　お願いします！」

フォルスナがすぐそこにいるのに、その発言は如何なものか。
フォルスナを見ると、彼女は俺に向かって握り拳の親指だけを上にあげる。所謂サムズアップというやつだ。
その表情を見るに、……どうやら何も問題はないようだ。

「マコト様」

気がつけばフィレーネは俺の目の前、お互いの吐息を感じることができる距離まで接近していた。

「っ！？　フィレーネさん？　近い、近すぎるよ？」

「……フィレーネとお呼びください。マコト様……」

フィレーネはその豊かな胸を押し付けながら、なお俺に密着してくる。

「……フィレーネ、近いから離れようか？」

「……嫌です」

「……ッ!？」

フィレーネはそう言つと、そのまま俺に唇を寄せ、自らの唇と俺の唇を重ねた。

周りからは「キャー!」と黄色い悲鳴があがっていた。

「おはようございます。マコト様」

「ああ、おはよう。フィレーネさん」

翌朝、俺がベッドで寝ていると部屋の中に入ってくるフィレーネ。

昨日はあの後もフィレーネにくっつかれて大変だった。夜寝るときも俺のベッドの中に入ってこようとするし……。フィレーネの誘惑に勝った俺を誰か褒めてくれてもいいと思う。

というか、そんなことになったらフォルスナの思惑通りになってしまうじゃないか。

「マコト様!」

「え……、何？」

「私のことはフィレーネとお呼びくださいと、昨日も申し上げたはずですが!？」

「ああ、ゴメン、フィレーネ」

それでいいのです！　と言わんばかりにフィレーネは満足そうな表情を浮かべる。

「それで？　なんで朝からフィレーネが俺の部屋に？」

「なんてと言われましても……。マコト様と婚約を交わしたのですから、婚約者同士が一緒にいるのは当然のことです」

「ああ、婚約ね。……こんやく？　えっと……どういう……？　えっ？」

「は……？　婚約……？　俺が……？　誰と……？　いつ……？　え……？」

寝起きの頭で思考回路が正常でもないのに混乱しまくる俺だが、フィレーネは容赦なく続ける。

「昨日、お母様や皆の前で接吻を交わしたではありませんか」

「あのキスのことかっ!？　いや、あれはフィレーネが無理やり……」

「マコト様なら、振りほどくこともできたはずですが?。」

「……………」

「さあ、朝食の用意ができておりますので、着替えて向かいましょ
う」

……ヤラレタ。流石魔王の娘だよ。

Side ファイレネ

マコト様のあの魔力……。

昨夜は失敗してしまいましたが、マコト様とならば次期魔王とし
て魔力の素質に恵まれた子供ができるはず……！

姉達を見返すためにも、絶対にマコト様を逃がすものですか。

それにマコト様は良く見れば可愛い容姿をしています。

……今夜こそは、絶対に成功させます！

フフフフ……。

5話

「フィレーネ」

「はい、なんですか？ マコト」

「その、もう少し離れて歩いてくれないか？」

「はい、嫌です」

「……いや、その、胸があたってるんだが……」

「いやです」

そう言うつと更に体を密着させてくるフィレーネ。

フィレーネと共に朝食をとった俺は城内を散歩しているのだが、フィレーネがどこにでもくっついてきて正直困っている。

ちなみに「マコト様」という様付けの呼び方はやめてくれとフィレーネに頼んだところ、いきなり呼び捨てにされてしまった。

なんでだ？　なんでこうなった？

「マコトは私のことが嫌いなのですか？」

「いや、嫌いって事はないが、……ほら、人の目が」

「嫌いではないのなら、良いではありませんか」

どうしたら諦めてくれるんだ……？

そういえば俺、なにか目的があったような……。

えーと……。

……あ。

「そうだ！ 俺、フォルスナさんの所に行つて、召喚魔法を習わな
いといけないんだった！」

そうだよ！ すっかり忘れてた！ それに母親であり魔王である
フォルスナのところならフィレーネはついて来ないだろう。

そう思つてフィレーネに声をかける俺だったが、フィレーネの口
から出た言葉に俺は絶望することになる。

「お母様はしばらく用事があるようで、今朝早くに出掛けましたが
？」

「……は？」

「お母様のことですから、恐らく最低でも一週間は戻らないかと思
います」

「マジデ？」

「はい、マジです」

それなら、魔力探知でフォルスナを探し出してやる……！ とか

思っていたら、「ああ、お母様は結界内に籠るとのことでしたので、探そうとしても無駄ですよ?」とのフィレーネの言葉。

確かにフォルスナの魔力を全然感じる事ができない……。またも絶望する俺だった。

「マコト。召喚魔法なら私が教えて差し上げますから、安心してください」

「フィレーネも使えるのか?」

「お母様の娘の一人ですから、勿論私も使えます」

そうか、フォルスナも娘達なら使えるって言ってたっけな。

「じゃあ、教えてもらおうかな」

「わかりました。では早速部屋に戻りましょうか」

俺の手をとり、強引に歩を進めようとするフィレーネ。だが、俺は全力でそれを拒否する。

フィレーネは恨めしそうな顔をしているが、ベッドのある密室で二人きりなんて、そんな見え透いた罠に引っかかるか!

というわけで、色々な資料もあるということで、図書室のような場所でフィレーネから召喚魔法の講義を受けることになった。

意外にもフィレーネの講義はかなりちゃんとしていて、すごく分

かりやすかった。一応二人きりには違いないのに、あまり暴走せずにちゃんと教えてくれたってことから、根は真面目なんだろうと思う。

フィレーネによればフォルスナの使う召喚魔法は2種類あり、一つは魂の繋がりを利用しての召喚。そしてもう一つは血の契約を利用しての召喚魔法があるそうだ。

魂の繋がりというのはフォルスナが言っていたように血縁関係にある対象。ちなみに理論上は三親等まで大丈夫とのことだ。つまり叔父、叔母、曾祖父母、甥姪までは召喚できることになる。

そして血の契約。これは使い魔召喚なんかに使われる契約方法で、主人の血を対象に飲ませたりして契約するというもの。

しかしこの契約は完全な主従関係で、被召喚者は主人の召喚依頼を絶対に断れないというデメリットがもれなくついてくるらしい。

フォルスナが行っていたのは勿論魂の繋がりを利用した召喚魔法。被召喚者は呼び出されるのを断ることができるらしいのだが、フォルスナはお母様であり魔王だし、それを断る娘はほばいないのとことだ。

「なるほどなあ。……あれ？ でも、俺がこの世界に召喚されたときの魔法はどうなってるんだ？ 魂の繋がりも、血の契約なんてなかったんだが」

「マコトが人間に召喚されたときの魔法ですか……。推測でしかありませんが、対象者を無作為に選ぶ召喚魔法だったのでしょうか。勇

者を召喚したいという目的から、より強い力を持ったものという条件もあったと思います」

「なるほど。それにしても迷惑な魔法だ」

「私としてはそのお陰でマコトに出会えたのですから、ほんの少しは人間に感謝していますよ」

フィレーネはそう言っただけで俺の隣に腰掛け、手を重ねてくる。雪のように白い肌はほんのりと赤みを帯びていて、艶かしい印象を俺に与える。

吸い込まれるような美貌のフィレーネに正面から瞳を覗き込まれ、俺はその魅力的な瞳と唇から目を離せなくなった。

……ヤバイ。

「マコト……」

「フィ……レーネ」

お互いの顔が吐息を感じることが出来る距離まで近づいた、その時――。

ガチャッ

「――ッ!？」「……チッ」

「フィレーネ、いる?」

突然の訪問者が現れ、ピンチを免れる俺だった。

……あ、あぶなかった。……というかフィレーネの舌打ちが聞こえた気がしたけど、気のせいかな？

「ああ、フィレーネここにいたの。レイアお姉さまが呼んでいたわよ？」

すぐにこちらを見つけた人物はフィレーネに声をかける。

「すぐ行つたほうがいいと思うわよ？ お姉さま、結構イラついておられたみたいだから」

「レイアお姉さまが？ ……わかりました。ありがとうございます、ルファお姉さま。……マコト、ごめんなさい、少し席を外します」

フィレーネは足早に立ち去り、パタンッ とドアが閉まる音がして静まり返る室内。

フィレーネを呼びにきたルファという女性は一言も言葉を発しないが、ジロジロと無遠慮な視線を俺に送っている。

「じゃ、じゃあ、俺は部屋に戻るかなー……」

俺は嫌な予感がしたのでこの場を去ろうと腰を浮かすが、「まあ、待ちなさい」とルファに襟首を掴まれ、逃亡することはかなわい。

ルファの顔には笑みが浮かんでいたが、それを見ても嫌な予感が

増すだけの俺なのだった

6話

「邪魔者がようやくいなくなったわね」

「フィレーネのことか？」

「他に誰がいるっていうの？ それにしても貴方、魔力はすごいくせに魔法耐性は大したことないんじゃない？ あんなあからさまな魅了の魔法にかかるなんて」

「……魅了の、魔法？」

「ええ、あの子の得意魔法よ」

魅了の魔法……ねえ、確かにさっきフィレーネの目を見ていたら吸い込まれるような感覚がしたけど、あれがそうなのか？

今まで精神系の魔法にかかった経験がないからなあ。前回の魔王討伐のときもガンガン敵をぶっ飛ばしてただけだったし……。

「ところでマコト、だったかしら？ ここにいたらそのうちフィレーネが戻ってくるから、場所を変えるわよ」

ルファはそう言っただけで俺の手を掴む。

そして突然目の前が真っ暗になったかと思ったら、俺はいつの間にか見慣れない広大な部屋の中に移動していた。

部屋は学校の体育館ほどの広さで、部屋の中にはシンプルなテーブルセットとベッドがひとつだけ。壁や天井に窓はなく、壁には木

のドアが一つだけある。

「ここなら誰も入ってこないわ」

ルフアはそう言いながら椅子に腰掛ける。俺も座ることを促され、ルフアの対面に座った。

「さて、改めて自己紹介させてもらうわね。私はルフア。お母様の53番目の娘で、魔王軍の中では主に魔法具関連の開発を担当しているわ」

褐色の肌をしているルフアはその豊満な胸を強調するようなドレスを身に纏い、更にそれを強調しているのか、挟み込むようにして腕を組んでいる。

髪の毛は少しウェーブがかかった黒色、頭部には2本の角が生えていた。

ルフアの自己紹介を受け、俺も改めて自己紹介をする。

「俺はマコトだ。まあ、知ってるよな？ 先日人間の召喚魔法によって呼び出された異世界の人間で、攻撃魔法や武術なんかはそれなりだと自負している」

「ふうん、魔法はともかく、武術ね……」

「それにしても、この部屋はなんだ？ いつの間に移動したのかもわからなかったし、どういう魔法なんだ？」

「いきなりの質問がそれ？ ……まあいいわ。そう、私の魔法よ。この場所は異次元空間に作られた私だけの場所。私が招待しない限

りこの場所には誰も入ってこれない」

「へえ、便利な魔法だな」

「うふふ、そうですね？　ここなら何をしても、絶対に外部にはわからないのよ？」

ルフアの金色の目が妖しく光る。

……これはまさか、フィレーネと同じパターンか！？

俺は思わず身構える。

「ああ、そんなに警戒しないで、私じゃないの。私じゃなくて、用があるのは……」

「私達だ！」「……だ」

「ッ！？」

ドカツ！

不意に聞こえた声と同時に衝撃が走る。

俺は文字通り吹っ飛び、背後の壁に背中から叩きつけられた。

「ごめんなさいね、この子達にどうしてもって頼まれたのよ」

言葉とは裏腹に全く謝っている態度ではないルフアの両サイドには、さっきまで絶対にいなかった、二人の女性が佇んでいた。

見た目そっくりなこの二人だが、片方は赤い肌に赤い髪、もう片方は青い肌に青い髪。頭には1本の大きな角が生え、筋肉質な体は大きく、二人とも身長は2メートルを超えている。

身に纏っているきわどい衣装も、色は違えど全く同じだ。

二人はルファと同じような金色の瞳を真っ直ぐ俺に向けている。

「この子達はアカとアオ。私の妹なんだけど、是非貴方と闘ってみたいらしいのよ」

赤と青って、もうちょっと名前を捻れよ！ 誰だ、名づけたのは！？

「私が二人の名付け親なのよ。ウフッ」

「……お前かよ！？」

漫才のような俺達のやり取りには目もくれず、二人は名乗る。

「私はアカ！」「……アオ」

「俺はマコトだ。受けてたってやる」

「行くぞ！」「……ぞ」

アカとアオはその言葉と同時に、その巨体には似つかわしくないスピードで距離を詰めてきた。

アカの繰り出す拳をギリギリでかわし、アオの蹴りを肘で受ける。

続いてアオの攻撃をかわせばアカの攻撃が、アカの攻撃を受ければアオの攻撃がと、息をつく暇もないほどの猛攻。

双子なんだろう二人の攻撃は絶妙のコンビネーションで、俺に攻撃する隙をなかなか与えない。

それでも俺は突きや蹴りを攻撃の合間に返すが、アカを狙えばアオが、アオを狙えばアカがフォローし、決定打にはならなかった。

「なかなかやるな、マコト!」「……ト!」

「そいつはありがとうよ」

そんなこんなでもう30分は攻防を繰り返しているが、一向に勝負がつかない。

目の端ではルフアがどこから運んだのか、ティーセットを用意してお茶を楽しんでいた。

「もし私達に勝ったら、マコトを私達の婿にしてやる!」「……やる」

「つと!」

アカとアオから同時に蹴りを食らって、そのまま距離をとる俺。

それにしてもあれだ、コンビネーションが抜群過ぎて、まるで4本腕4本足の相手と戦ってるみたいな感覚だ。

昔読んだ漫画の中に複数を相手取る場合はそいつらを一人だと考

えて対処すればいいとか書いてあったけど、こいつらは一体になりすぎて逆につきついで。

婿になるとかそんなんはどうでもいいんだが、負けるのは断固拒否だ！

お互い息もあがっていないからまだ余裕しゃくしゃくなんだけど、いい加減飽きてきた。

……そろそろ終わらすか。

「どうした！ これで終わりか？」「……か？」

「いや、お前らが女だから手加減してたけど、ちょっと本気出すわ」

俺はわざと二人を挑発するような言葉を吐く。

「なんだと！？」「……！？」

二人の目つきが一段と険しくなる。どうやら挑発に乗ってくれたようだ。

「随分と舐めたことを言ってくれるじゃないか！」「……か！」

「いいから、さっさとかかってこいよ」

「……この！」「……の！」

俺の駄目押しの一言を受けて、アカとアオが同時に地面を蹴る。

二人とも頭に血が上っているのか、速さはさっきよりも速いが、

攻撃は真っ直ぐに拳を突き出してくるだけだった。

俺は力を抜いて自然体で二人の手を往なすと、それぞれの腹に向けて掌底を放つ。

魔力を込めて放つ掌底は、車程度なら粉々にできるくらいの威力が込められている。

「なっ!?!」 「……!?!」

カウンターでまともに俺の掌底を受けたアカとアオはそれぞれの方に吹っ飛び、壁に叩きつけられて意識を失ったのだった。

7話

「……あれ？」

「あーあ、こんな子供に手加減もなしにあんなことするなんて、マコトって随分と酷い人間なのね？」

二人の少女を抱き上げてベッドに寝かせるルファ。

何故かベッドの上には今の今まで闘っていた赤と青のグラマラスマツチヨではなく、小柄な少女が二人横たわっていた。

「え……？　もしかして、これがアカとアオなのか？」

「そうよ？　この子達は魔力を身体能力に転換して、並みの巨人以上の力を出すことができるの。まあ、マコトはその巨人以上の力を持つこの子達に勝っちゃったわけだけど」

ベッドに横たわる赤と青の二人の少女は、確かにさっきまで闘っていたアカとアオらしい。

伸び縮みするのか、身に纏っている衣装はきわどさそのままで小柄になった体にもフィットしていた。

「これは二人ともしばらく起きれそうにないわね……。悪いけどマコト、二人が起きるまで一緒にいてくれる？　私は少し用事があるから」

「え？　おい？」

「二人が起きたらここから出る方法を聞くといいわ。それじゃあねー」

俺が引き止める間もなく、ルファはこの部屋にたった一つしかないドアから出て行く。

俺はすぐに駆け寄りドアを開けようとしたがドアノブはびくともせず、魔力を込めた掌底でもドアをぶち破ることはできなかった。

「……はあ」

俺はベッドに寝ているアカとアオを見てため息をつく。

……まさか本当はこんな小柄な女の子だったとは。

あどけなさの残る顔立ち、すらりとした華奢な手足、サラサラの髪、胸は……これから期待か？ 本当にさっきまで闘っていた相手だとは思えない。

アカとアオは見た目が小柄な少女になっても、肌や髪の色以外はそっくりなままだった。

「一応、傷くらいは治しといてやるか」

俺は二人に回復魔法をかけてやる。

魔法の光が二人を包み、目に見える切り傷や痣は消えていった。

二人の寝息が穏やかになるのを見届け、俺は二人が寝ているベッドを離れて椅子に座り、虚空を眺める。

「それにしても、こつちに来てから流されるままだな、俺」

ほんと、いろいろとペースを崩されまくりな気がする。

ん……？ でもよくよく考えてみれば、一回目のときも二回目のときもこんな感じだったような……。

一回目はいつの間にかエルフと獣人と人間の橋渡し役みたいなことをやってたし、二回目は頼まれるまま魔王退治なんてやつちゃったしなあ。

実は俺って意外と流されやすい性格なのかも？

物思いにふけること一時間。俺は自らの流されやすい性格や意外と押しに弱い自分に気がつき、軽く落ち込んでいた。

「……ウン」「……」

アカとアオと俺の息遣いしか聞こえなかった広い部屋の中、ゴソゴソと寝返りをうつつような布の音と、アカのものだろうか？ うわごとが響く。

「お？ 起きたか？」

俺はベッドに近づき二人の顔を覗き込んだ、その瞬間――。

「いただきっ！」「……き！」

アカとアオの細い手足が俺を捉え、アカの顔が一気にアップになる。

「ムゲ!？」

ガツンッ! と歯と歯がぶつかり、口の中に鉄の味が広がった。

「次っ! アオ、早く!」 「……うん!」

「なにしゃが——ツムゲ!？」

アカが離れたと思ったら、間を空けずに今度はアオが俺の唇を自らの唇でふさぐ。

「これで私達は婚約者同士だなっ!」

俺と唇を重ねるアオを見て、満足そうに宣言するアカ。

……やられた。

「マコト!？ どこに行っていたのですか!？」

ルファの部屋から脱出し、城の廊下をアカとアオの三人で歩いていると、俺を見つけたフィレーネが声をかけてきた。

俺の右にはアカ、左にはアオがそれぞれ俺の腕を抱きかかえるように寄り添っている。

歩きづらいことこの上ないんだが、めちゃくちゃ強い力で両腕ともガッチリとホールドされているので、ほどくにほどけないのだ。

それを見たフィレーネは眉をひそめ、俺にではなく両隣の少女に問いかける。

「アカお姉さま、アオお姉さま。どうしてマコトと一緒に？」

うん？ ……お姉さま？

「ソフフー……。婚約者なんだから、一緒にいるのは当たり前だよ」

「……当たり前」

「マコトの婚約者は私です！」

「フィレーネだけがマコトの婚約者だなんてズルイから、私達も婚約者になったんだよ」「……よー」

「……マコト！ どういうことですか！？」

キッ！ とフィレーネが俺を睨む。

その迫力に思わずたじろぐ俺。

「フィレーネ、マコトを怒るな！ マコトは私たち二人に勝った。私たちは決めていた。私たちに勝つことができる男がこの世にいるなら、その男を夫としようって」「……だから」

二人は俺を見上げ、フィレーネに視線を戻す。

「それにそもそも、お母様はマコトが私たちの中から一人だけを選べなんて言っただけじゃなかった」「……なかった」

「……それは、……そうですね」

「……なんとなく、話纏まった、か？ それにしてもさっきの発言が気になる。」

「……あのさ、アカとアオって、フィレーネよりも年上？」

「そうだよ」「……よ」

当たり前のように答える赤青の双子。

見た目じゃ完全にフィレーネが年上なんだけどなあ。

「じゃあ、アカとアオはいくつなんだ？」

「21だ」「……だ」

「……。んじゃ、フィレーネは？」

「私は17歳です」

そうだったんだ。いや、まじで見た目じゃ年齢がわからん。

「ちなみにフォルスナは？ 何歳なんだ？」

「お母様？」「……さま？」

「そういえば、私は知らないです」

「私達も知らない」「……ない」

「ルフアお姉さまなら知っているかしら……？」

8話

「ちなみになんだが、ルフアの年齢はいくつなんだ？」

俺は3人に尋ねる。

「んゝ、多分……よん」「……」

「あら？ 折角マコトとの仲を世話してあげたのに、あなたたちは私に恩とか感じていないのかしら？ お姉さん、二人がそんなに薄情だったなんて知らなかったわ」

「ルルル、ルフア姉、私たち、何も言っていないよ！？」「……言っていない！」

いつの間にか俺たちの背後にいたルフアが突然会話に乱入してくる。

いくら油断していたとはいえ、気配もなしに俺の背後をとるとは……、やるな。

そもそも言おうとしたのはアカだけだったと思うんだが。アオも言っていないのに謝るし、正に一心同体ということか。

「まあいいわ。それよりもマコト、ちょっとついて来てもらえる？」

「ん？ なんだ？」

「これから大お姉さま達に会いに行かないといけないのよ」

「大丈夫だって、それじゃ、行つて来る」

次の瞬間。ルファの魔法で転移した俺を待っていたのは、威圧感をたっぷりと含んだ美しい女性達だった。

「大お姉さま方、マコト様をお連れしました」

ルファが豪華な椅子に座っている4人の美女に深いお辞儀をして、俺を紹介する。

「ご苦労さま、ルファ。……それで、お前がマコト？」

「ああ、そうだ」

ルファに労いの言葉を送り、こちらに問いかけるのは褐色の肌を持つ美女。

ウェーブがかかったポリウムたっぷりの赤い髪は艶やかで宝石のように光り輝き、その相貌も燃えるような赤。豊満な胸や艶かしい脚を強調するかのような露出の激しい赤と白のドレスを身に纏い、彼女の魅力を引き立てている。

頭部からは羊のような角が生えており、その角や腕や首には宝石が散りばめられ、それらは全て彼女の引き立て役となっていた。

気だるげな表情でこちらを見つめる彼女の唇は薄く開かれ、なん

とも官能的だ。

「ちょっと、ジュラ、先に自己紹介でしょう？」

次に口を開いたのはうつてかわって清楚さ際立つ美女。

絹のような滑らかな髪と、まるで陶器のようなその肌は白。来ているドレスも白で絹のような滑らかな素材のところどころに銀糸で刺繍が施されている。

柔らかな微笑みを崩さず、白く輝くその姿は魔族というよりも女神様といった感じだ。

「クレレの言う通りだ。たとえ人間が相手であっても、最低限の礼儀は忘れてはならない」

白の美女の発言を補うのは青い美女。

シャープな印象をこちらに与える彼女は青い髪の毛に白い肌で、瞳の色も青。

身に纏っているのは美しく磨かれた鎧で、白金でできたそれはまるで鏡のようだ。

額からはまっすぐな角が生え、先端の部分にいくほど色は透明になっ
ていてなんとも美しい。

「そう、ましてや母様に認められた人間だ。すまないな、人間、マコトよ。私はロワール。母であるフォルスナの一番目の娘だ」

最後に言葉を紡いだのは黒髪の美女。

艶やかな黒髪と漆黒を思わせる黒い瞳。身に纏っているドレスは露出こそ少ないがボディラインを強調する形で、そこはかとなく色気を感じさせる。

発している強烈な威圧感は彼女が最も高く、俺の後ろに控えるルフアも萎縮しているようだ。

それぞれ、赤い美女はジュラ。白い美女はクレレ。青い美女はユニス。黒い美女はロワールと名乗った。

「さて、何故マコトを呼んだのか、理由を話そう」

「——なるほどね」

ロワールから話を聞いた俺は一人納得していた。

要するに、フォルスナが認めたからといって、安易に俺のことは受け入れられない。裏切らないって証拠を示せてことらしい。

そりゃそうだ。そんなにホイホイ人を信じるもんじゃない。ましてや出身世界は違えども、こいつらの戦争相手と同じ人間だしな、俺。

「まあいい。で、どうやって示す？」

「簡単なことよ」

と、クレレ。

「人間に支配され、蹂躪されし町を、お前の力で奪還してもらいたい」

と、ロワール。

……本当に簡単に言ってくれるな、オイ。

「それにしてもこちらに来て2日足らずで、もう3人の妹達と婚約したらしいじゃないの」

ジュラ。

「そうなのか？ 私はそんな話は聞いていないぞ？ 人間、マコトよ、詳しく聞かせろ」

ユニス。

「そうなのです。お姉さま！ マコトは既に夜はフィレーネとベッドを共にし、先ほどなどアカとアオと……！」

と、ルフア。……って、ルフア！？ 何言ってくれちゃってんの！？ なんで両手で顔隠して、悲痛そうに言っちゃってんの！？

「ほほう……？ マコトは随分と手が早いようだな？」

「ちょ！？」

言葉と共に、ユラリとロワールの髪が逆立つ。

うのー……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1519t/>

三度目の異世界

2011年10月8日11時15分発行